

令和8年1月30日

自己評価報告書

社会福祉法人いるま保育会
いるまこども園長 小川 勝利

1. 自己評価の目的

本園では、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、教育・保育の質の向上を図ることを目的として、職員による自己評価を実施した。

本園の保育方針である「見守る保育（藤森メソッド）」の視点から、実践の成果と課題を明らかにし、今後の改善につなげるものである。

2. 評価方法

- ・主任3名による日常の実践の振り返りを基に実施
- ・評価は3段階（◎・○・△）で行い、記述による考察を加えた
- ・評価結果は職員間で共有し、園全体の課題として整理した

3. 評価結果の概要

(1) 子どもの主体性を尊重した保育

子どもの試行錯誤や失敗を肯定的に受け止め、失敗から学ぶ環境は定着しつつある。活動を子どもたちが選択することはできているが、順序制選択及び習熟度別選択といった活動が不十分である。

主体性を育む環境設定にゴールはないので、今後も考え続ける必要がある。

(2) 保育者の「待つ・見守る」関わり

子どもの行動をすぐに制止・指示するのではなく、「待つ」「見守る」姿勢が定着しつつある。更に、子ども同士の関わりの重要性を理解する職員も増えている。

今後は、危険回避と子どもの挑戦との見極めについて、さらに共通理解を深める必要がある。

(3) 環境を通した保育の実践

子どもの発達や興味関心の変化に応じた、玩具の見直しが必要である。

引き続き、環境構成が保育者主導になっていないかを振り返る必要がある。

(4) 子ども理解と対話

個々の子ども理解の必要性は浸透している。子ども同士のトラブルを学びの機会として概ね認識できているが、一部の職員にトラブルをネガティブに受け止める傾向がある。

(5) 職員間の学び合い・振り返り・研修

子どもの姿を基にした対話の機会は確保されている。

研修では、参加した職員とそうでない職員間に温度差を感じる。

今後は、見守る保育の理解をより深めるための研修の参加に対して、全体的にモチベーションを上げていきたい。

(6) 保護者との共有・連携

保育の考え方を伝える努力を行っているが、「見守る保育」の意図が十分に伝わりきらない場面もあり、説明方法の工夫が必要である。子どもの育ちを肯定的に保護者と共有できているケースが増えている。保護者との何気ない会話を増やし、円滑な関係を築き続けたい。

4. 総合的考察

本園の教育・保育は、子どもの主体性を尊重し、「自分で考え決定し、自分から行動できる子ども」の育成という方向性は概ね理解し合っていると感じる。

一方で、子どもたちの発達に応じた玩具や環境の見直し、保護者との何気ない雑談から生まれるコミュニケーションを心がける必要がある。更に、保育理念や保育士の意図を保護者に説明できるよう、継続的な改善が必要である。

5. 今後の改善方針

- ・職員間での学びを深め、保育環境の話し合いを意図的に確保する
- ・定期的に保育環境を振り返り、子どもたちが集中して遊べる環境を保持する
- ・保護者への情報発信を充実させ、園の保育観の共有を進める

6. まとめ

今後も本園は、幼保連携型認定こども園としての役割を果たしつつ、子ども一人ひとりの育ちを大切に教育・保育の質の向上に努めていく。